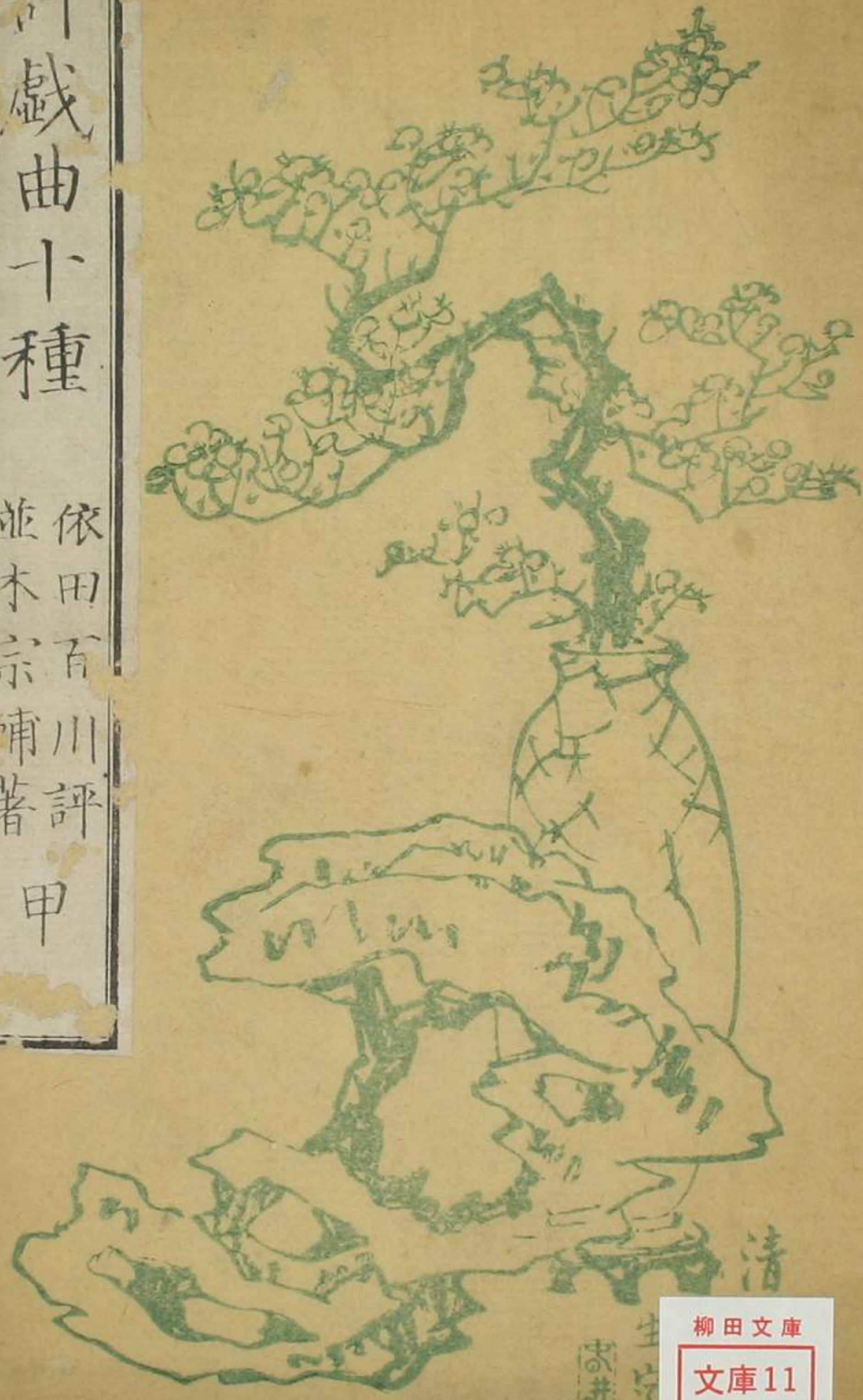


評戲曲十種

依田百川評
並木宗甫著
甲

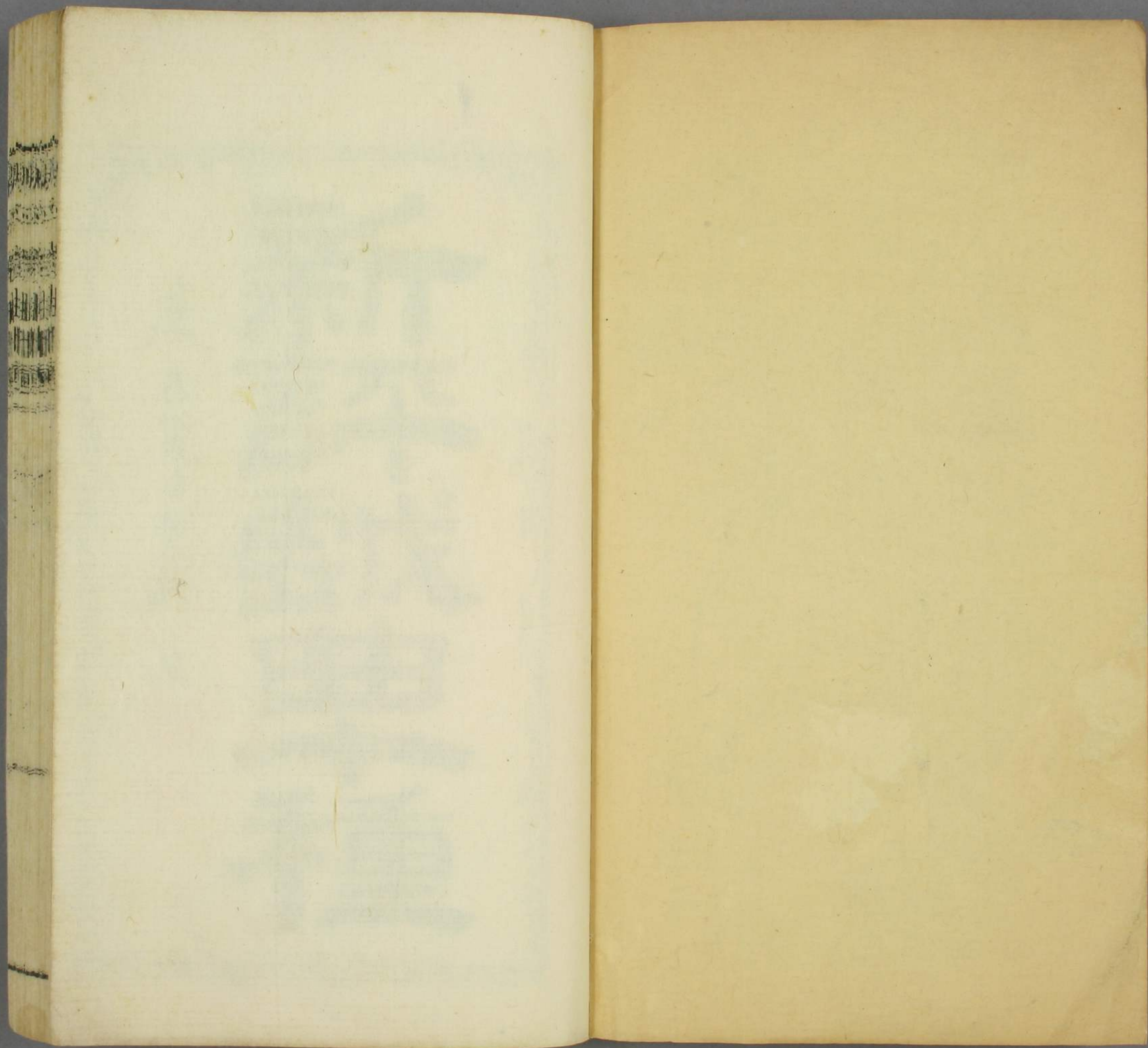


柳田文庫

文庫11

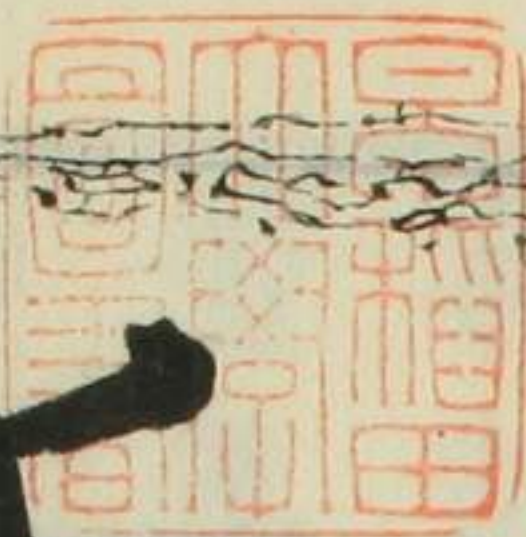
A 273





新平戊申曲種

庚辰夏日萬英書



保福齋



新評戲曲序

習善

昔王新城最喜說部。其時寸人翕然從之。魏
升子與友書。偶及水滸傳。評論多前輩所未
發。二公並當世名儒。文章德義推為泰山北
斗。宜視稗官小說。不啻涕唾。而其嗜好如此。
學海居士好學。善文。喜讀帶經堂及三魏集。

柳田泉文庫

又嗜水滸西遊諸書。旁及吾邦院本戲曲。莫不博涉綜覽焉。頃出其所評戲曲一卷示余。曰是余講文之餘戲也。子幸叙之。夫水滸西遊二書固絕世竒文。然得金聖嘆悟一子評。中讀者乃開一生面。非復前日之水滸西遊也。院本戲曲不過供兒女子觀玩耳。然一經

居士批評。波瀾頓挫起伏抑揚。無法不備。變俚俗之辭為絕妙之文。可謂點瓦成金手矣。且戲曲多鄙猥之言。但叙忠孝節烈事。間有悲痛淋漓可泣可慨者。耐子嘗謂聖人之體道也大。其稍合者必錄。故不特仁管仲賢晏嬰。即至子桑伯子不衣冠而處。猶以簡取之。

然則院本戲曲苟有可取焉不必棄也居士
評而傳之豈唯愛其文辭而已哉明治庚辰
五月柳北醉史題於澤上草廬



竹山高田周書



並木宗輔傳

學海居士

宗輔生於浪華長於市廛因號市中庵善俳歌衝口
而發滑稽諧謔妙解人頤嘗從西澤一鳳學作戲曲
奇趣驚人身保間浪華有淨琉璃戲曲二座曰竹本
曰豐竹開場於道頓溝東西近松竹田二氏在竹本
座聲名籍甚每一新曲出喝采之聲傾動街市宗輔
時在豐竹座謂一人之智巧有限極力為之無以越
人非聚眾智籍眾力不足以盡人情矣乃與同儕謀
令一篇為數齣各作一齣然後宜刪刪之宜增增之

斤平戲由十種

並木宗輔傳

貫穿聯合。鎔鑄融液。字鍊句琢。描情極態。使觀聽者。遭其可泣。則放聲大哭。遭其可笑。則捧腹絕倒。於是宗輔氏合作之名大著。其傳於今者八種。而其自著者二三種耳。以寬延二年九月歿於家。後之稱並木氏以戲曲著者。皆出宗輔門云。夫戲曲之妙在善寫人情。非反覆討論極其蘊底。不能盡人情。是宗輔氏之所藉衆力歟。嗚呼。戲曲且然。况大於是者乎。

凡例四則

一 稗官小說君子無取焉。况於院本戲曲乎。然人情固不相遠。文辭雖俚。模寫入神。非尋常文章家所及。則采芳采菲。蓋亦或有之。近世名儒如賴山陽。森田節齋。舉以講文法。可見不得一槩排絕。

一 此篇評語。係余八九年前舊作。枕上燈前。率意命筆。語無倫次。一時取適。不欲傳播。會頃筐掃蠹書。賈一見。請授梓。禁之不肯。且從其意。

一 評語或列上層。或挿行間。列上層者。指其妙處。挿

行間者說其文法。間有可合論者。不必據此例。一凡文章目覩而神會。領其妙處。然有心朗誦快讀。始能得其意者。况院本戲曲。本主於音調。覽者讀評語。然後取本文。諷誦之。最為妙契。

新評戲曲十種

一 谷嫩軍記 第三回上 石屋之段

依田學海先生戲評 並木宗輔著

此回分前後兩大段。本是院本陳套。唯前段是虛寫。後段是實寫。蓋所謂石工。弥陀六。即平宗清前段中曾不一語。犯其本色。使讀者在煙霧裏著眼。然不留一兩字。與具眼者。不足以見其自在之筆。故一點額有黑痣。以照應後段。又所謂美少年。即平敷盛。叙來滅沒。使人疑為幽鬼。曾不一言著其

磨頭用和歌一首何等
婉約温藉前一段所以
有美人才子之話不唯
為便叙起老石工

正身讀來讀去唯覺鬼氣滿紙然不留一兩語與
有識者不忌以見變幻之文故一點青葉笛以狀
射後段是虛寫中又有實寫處
如小和らば又かゝる津の國地新の松影
是松名兼米是詠置在世可歸語暗藏一本と俱ふ年と
地名呼起石工前一段主旨在裏
經一家の黒痣此看官要認口くせふ佛代名茂唱ふ
かゝる白毫は弥陀心とくゝあは此石屋有先叙弥
主實交も信心の同氣同行相求朝暮勤るか經
の責美佛の終下を諸國法山小建置し石塔10

宗清為平氏多建石塔
是後段話持在首段一
點來法度極密不是閑
語

口裏不絶念佛順帶叙
去妙有情致

多戒名然諸國建塔是後段伏線漫
た願以此功德ふまに回向の聲は殊殊ふ有此數
掩建塔緣由且說新名緣日暮初見ふ門口へ建立てくる
起不使遽悟其為宗清
か同行衆ふごさつてなふハ大分第ハ内小房
業此取を直ま看經した今仕思ふあがら志
やれふむあふぶが弥陀六今世
殊教より此教お悔つが遠夜百善道中にいつて
憐れまきした語エなんふそふ志やどまや案り

可不知

婢女自成婢女語懼怕
膽怯與奴僕語不同

入行媒一路婢僕問答
畢竟為博得此一句

やまゝも如^ゴ在^トハふい此間うらひ多くといふて
もい^ウ多^ク此^レ意^ハ叶^ハふ井戸へ水^ヲ投^スの
首^ヲお^シて死^スの^トい^ハふ^ハ斗^ハい^ハふ^ハて^ハお^シや^ハ
是^レ婢^ノ語^ナ
そ^レ里^ノや^ノい^ハる^ハこ^ノつ^ラや^ノの^ハそ^ノん^ナら^カう^ウお^シや
な^ツふ^ハ一^ニ度^ニで^ハお^シ切^ラお^シや^レと^ハお^シつ^ラふ^ハと^ハ合^ス点
お^シて^ハい^ハつ^ヲを^ハ逢^ハお^シや^ハお^シま^ハい^ハふ^ハ
是^レ僕^ノ語^ナ
う^ラる^ハ多^クい^ハ幸^ニ今夜^ハお^シあ^ハる^ハ見^ハへ^ハ苦^シお^シや^ハは^ハは^ハ
是^レ婢^ノ語^ナ
其^ノ間^ハふ^ハ且^ニ那^ノハ^ハ
是^レ僕^ノ語^ナ。用^ハ歌^ノ後^ノ語^ヲ直^ニ接^シ婢^ノ語^ナ亦^ハ是^レ首^ノ字^ノ法^ナ
何^ノの^ハい^ハ此^ハ百^ノ萬^ノ遍^ニ
何^ラち^ノや^ノつ^トと^ハお^シや^ハお^シま^ハい^ハふ^ハ娘^ノ語^ナ其^ノ譯^ハい^ハふ^テ

行媒用不著奴僕必須
女婢故亦把彦助排去
邊正是排弥陀六去
一樣文法

前節一轉寫出凄涼光
景鬼氣逼人使看者疑
是少年全然為幽鬼

工面さつちやまおまや寐所^ニ彼時^ハ分^ハ獨^ニ角^ノか^ト
取^ルま^シお^シふ^ハと^ハ云^フい^ハ係^ト手^トと^ハ奥^ノの^ハ間^ニへ^ハ別^ニま^シて^ハお^シを
ハ^ハ入^ルお^シい^ハふ^ハ
鄙^ノ猥^ノ語^ヲ却^テ不^レ説^ク破^ク又^ハ無^キ是^レ等^ノ戲^ノ誰^ハ不^レ得^テ説^ク出^テ後^ノ段^ノ情^ヲ話^ス
既^ニお^シ其^ノ夜^ハお^シ丑^ノ満^ノの^ハ
風^ハお^シん^ナく^ハと^ハ更^ニ渡^ルお^シい^ハお^シお^シを^ハお^シ記^ス時^ハお^シあ^ハま^ハ此^レ
向^テ是^レ出^テ少年^ノ語^ナと^ハう^ノの^ハ聲^ハお^シお^シ聞^クゆ^ハま^ハいと^ハお^シ終^ル心^ヲ
お^シお^シお^シと^ハい^ハふ^ハう^ノ。さ^レ此^レ一^ノ句^ハ是^レ小^ノ雪^ハハ^ハ部^ノ屋^ニと^ハ立^テ出^テ
出^テ姐^ノ兒^ノ多^ク婢^ノ狀^ナ
下^ニ灯^ヲ火^ヲか^シい^ハば^ハ窺^ハへ^ハ。窺^ハ字^ハ寫^シ出^テ許^ス門^ノの^ハ戸^ハ不^レと^ク打^ツ
、と^ハ頼^ミま^シせ^ウく^ハと^ハい^ハふ^ハ聲^ハ。お^シお^シ方^ハお^シお^シお^シお^シお^シ
衆^ノ様^ハお^シお^シお^シと^ハ飛^テお^シお^シお^シ不^レ先^ニ寫^シ媒^ノ人^ノ直^ニ寫^シ姐^ノ兒^ノ
然^レ後^ハ漸^ニ次^ニ叙^ス来^テ不^レ是^レ板^ノ戸^ノ口^ト

重

一谷嫩軍記

初迎將來及不報羞
就坐了一頓羞縮寫出
小娘子情性酷肖可愛

應答套語若從姐兒口
裏說出來大覺無味婢
女話頭妙於順滑

語氣蒼涼自是鬼語不
必寫其衣服顏色而這
一句并狀貌描出來

少年對婢發問當須婢
答及使姐兒答之便妙
處置

漸入蔗境妙用模糊語
自然有是等光景

婢女是姐兒替身姐兒

明てようこそお出。けごちべと体。ふて下に居る

間も胸せかれ。急忙殺顔ハ七氣此ハ拵指意いて

本づく。挨拶も出ぬ其内にお岩が聞付走出。姐

發不得一語便借。是ハくお岩元極今日お出の約束故

只今迄待す。こごなせ更てお出ふされ。是婢

まバ手前ハ少様子もて人目を忍ぶ者なきを益

ハ。勿論夜通も密な時刻と心づけ態只今奈じか

故成荒涼語使。先達で沍置た石塔ハ出来す。から彼

看者疑是幽鬼。故不説建塔地先由亭主小逢す。

い少年イヤと様ハ只今留守でござりませぬが、お

まづがお出ふされ。から待せ。まして墨搦ふと。六

お岩。是姐兒語半對少年半ア申付て出られ。た。把姐兒

截從自己口裏說出活歸られ。まを迄名代ハハ娘も吐

此相手不して。うづ。答つ。やゆ。函。か。と。か。と

お心安ふ。し。で。進。せ。下。ふ。り。お。せ。是婢語。奥。一。と。と

、ひき。然。ら。ば。左。様。致。さん。と。何。の。心。も。つ。る。立

て。一。間。一。通。る。後。う。げ。見。送。な。お。岩。ハ。手。紙。打。て。て

扱。ハ。能。器。量。お。此。様。お。お。死。ハ。日。本。國。を。尋。て。お

心裏包著、多少情話都
被婢女說破

整押話頭、反以滑稽說
出來、只見可笑、不見可
厭、是護短妙法

行媒既用著了、乃排一

今一人といふ、少年容貌從婢女口中
中說出以補前文惚さ志やんそもさ
理く、さうが、小雪掻うろ付てごけろ所ぢやふ
いちやつとつて教と通り、何うな、あ、あ、あ、
ら、抱、付、て、ご、け、ろ、ご、え、い、ご、や、ま、ま、上、へ、あ、ら、ぬ、や
う、下、う、ら、随、分、あ、ら、び、あ、ふ、れ、猥媒語不叙在正文裏亦
從婢女口中說來為姐兒
留身、ア、まだうぢう、ハもどか、や、サ、ア、ふ、と、むり
やり、に、押、し、や、り、突、や、り、初、び、つ、ち、や、り、ア、世、話、や、の
ど、ふ、や、ら、わ、う、や、ら、首、尾、あ、つ、つ、是、か、ら、休、む、は、終
な、此、ど、な、つ、つ、一、室、の、壁、ぶ、し、に、隣、の、餅、搦、や、う

過去、直入正文

如滅如滅文字變幻鬼
氣撲人

此段若說風流情事即
是凡手如此說來始見
變化之妙

下、寐、ら、れ、を、む、な、い、さ、か、つ、と、や、と、與前節彦助語一様及
不重複婢女自成本色
好語便、い、い、つ、練、手、一、入、初、一、小、雪、ハ、立、出、興、ふ、め
顔、モ、う、ん、よう、ふ、お、あ、流、採、慥、小、奥、い、い、か、志、や、ん
い、た、ら、か、い、か、れ、姿、か、え、ぬ、ハ、ど、ふ、ぢ、や、前節逐層
說入此段
讀者意有風流情事不料悲愴凄切變
箇驚啼花笑佳境做他樣叫草枯光景ふ、さ、く、と、う、み、さ、き、よ
る、く、尋、る、肉、こ、ふ、ふ、の、障、子、さ、つ、と、め、や、爰、小、居、中
そ、ハ、い、の、是少
年語そ、ハ、志、さ、り、意、路、の、悪、い、つ、つ、の、同
小、振、ふ、さ、つ、と、人、の、思、ふ、振、う、と、な、い、心、は、よ、い、お
方、ト、也、是姐
兒語と、去、つ、傍、へ、指、寄、ハ、一、遍
妙飛、い、さ、つ、て、二頓
妙

一 谷 嫩 軍 記

これく、始終の孫子と見ず、お付流し、お心の志
 嬉し、いと云な、うら、あ、深き、梅子、も、天、飯、に
 も、妹、皆、の、う、た、ら、い、を、あ、ま、る、叶、り、ぞ、縁、如、知、る
 前、生、此、約、束、な、ら、め、と、諦、て、思、ひ、切、て、下、さ、れ、と、
 い、ふ、も、道、不、氣、の、毒、此、打、ち、お、ま、た、る、其、風、情、讀首節 猶不覺
 其、為、鬼、為、人、至、此、全、然、是、鬼、誰、知、讀、至、後、段、即、是、生、
 人、其、與、姐、兒、沒、情、所、以、盡、義、凶、婦、不、有、一、語、無、來、歷、
 子、落、磔、撮、子、う、ま、連、も、花、程、不、思、ひ、世、心、と、盡、そ
 う、い、も、な、情、あ、う、も、ふ、り、捨、て、や、あ、つ、志、や
 且、生、て、居、ぬ、む、ご、い、難、面、お、心、恨、歎、け、此是 全語

一、再、讀、是、全、然、鬼、語、細
 讀、之、反、是、確、有、來、歷、所
 謂、塔、成、便、不、再、至、者、真
 個、生、人、避、禍、逃、難、逐、路
 所、不、讀、至、後、段、無、些、障
 碍、何、半、周、密、何、等、精、細

不必說只是呼起
 後文少不得此語
 いやと恨、去、事、ふ、く、ら、逢、ハ、列、の
 初、と、い、ふ、壁、小、洩、ぬ、糸、身、の、上、頼、屋、な、る、石、塔、か、今
 小、も、成、就、志、て、あ、ら、ハ、前文許多曲折始把建塔 再ハ此家 忘卻任一邊至此再提
 一、来、ら、ぬ、故、逢、え、ふ、ふ、ハ、叶、ふ、事、ハ、儘、分、ら、ぬ、ハ
 虫、の、あ、ら、ひ、も、う、ま、を、物、ハ、人、の、身、ハ、つ、ま、ハ、皆、夢
 と、思、へ、ハ、さ、の、こ、迷、ひ、か、ま、は、又成鬼語、去、ふ、ハ、
前更覺悲愴
 今、成、候、か、の、外、ま、と、い、く、ハ、誰、ハ、名、残、惜、ハ、物、ハ
 も、戀、し、き、折、う、ら、ハ、心、の、い、さ、め、共、な、ら、ん、い、て、
 筐、に、奉、ら、せ、ん、と、錦、の、袋、押、ひ、ら、き、青、葉、ふ、ハ、下、

新平 戎由十種

未通殷勤先遺記念物
則之事情殊不免驚突
然不置此一語恐失後
段線路此是作者苦心
處

叔拾婢女不滲漏

笛^{看官要認著}行と^{笛竹二字}渡^心もあ^ちき^あく^載之^身。
ま^さふ^うら^ふ道^不向^不矢^先ハ^不。
ひ^よん^ふ事^志やと^是姐^兒語^此不^但姐^兒
詞も^涙ふ^れる^ら折^ら道^こ口^之せ^ふふ^じ。
あ^まふ^むら^むだ^六阿^弥陀^接連^寫来^并見^其口^氣妙^速夜^のい^ませ
さ^灰り^門の^戸と^明い^くと^打き^をけ^ばあ^いと^奥
う^ら返^るし^てお^岩が^かけ^出此^處要^用日^那様^のお
歸^りそ^ふ不^是婢^女對^主人^語こ^小雪^様折^角戀^ふる^は色^こ
あ^をた^た此^後で^思ひ^切お^まく^の心^がい^くふ^く

何早一語若在平常不
過套語此處一點妙具
情致

弥陀六語之著意是心
裏包著許多感慨未

又是押襲語以滑稽說
出來不落淫書一路

てもの^とい^ふ不^い。せ^めて^不の^心の^さい^此間^ふら
や^つと^把付^ふふ^れと^むら^い押^さり^なら^ない^ら。
い^浅明^一面^帮助^姐兒^一面^請迎^主人^一箇^婢
た^何の^早々^ら百^々々^々と^さら^らと^と。
の^出し^て斗^かも^さら^な夜^が更^ふふ^あ。
處^々不^脱念^佛御^客衆^ハご^どつ^と。
狀^如ど^ふぢ^やく^是弥^陀六^語サ^さつ^さに^見へ^くけ^さと^恥
い^ふふ^かの^口で^いぢ^がつ^いむ^らか^ふふ^ふ
ふ^ぢて^くふ^ふ浅^もぢ^と。^つと^娘が^泣あ^そ

新平 戎由十種

一谷嫩軍記

弥陀六是宗清姐兒是
主君小姐自然所這話
不免著忙急問讀至後
段始覺其妙

いらふとこれはいふ是婢語。故成模糊。何志や娘
かまふといらふ是弥陀六語。是婢語。ふむあゝたぐ。是
六念佛不別。旦那様と志たるが悪いすやうは門口
著一語妙極
ふぶつぶ浅肉べむいかいながはまかといふふ
かやいふ是婢語。はま志つくりとくバゑいふ
どふやら終つてつゞてとらと思ふ句断。滑
繁煩反 どもやか目小切くろくとむつと通つて誓語不要
是好 見少年只寫就席 是はく無む待遠ふごさりま志よお
模様情景並見
御詔の石塔今日の約束ふまや夜を日ふついで

姐兒對少年不發一言
反與父親說話活是處
女模樣

少年一來一去似没甚
麼關係不知玉織姬見
殺殿大配缺這團圓

漸出來今朝うら若い者等に運かせた與前文
索相始應 大か建たてぶりおまふ是弥陀六語それハ
婿いやいゝる世話でぶづつた是少年語世話ハ家業
おやがお氣ふいさらあらも仕合アはらふたて
下よりよせ是弥陀六語成程く同さ志て参り是少年語
んならお供致しま志よと立て用意と取急けハ
にとも撮るも一所ふりくといひふそまや何
でハ石塔の恰好くちこう見ふ是不必說只成後文来路テおまけとない何
のそれか見らるるで爰やあそみのは志やま 殊

新言虛由

一谷嫩軍記

作者程造 一美人來 為那替身

漢上小説寫景描情非
不妙然寫景只是寫景
描情只是描情用筆自
別殊之自在此段前後
錯綜情景亦寫一路文
字如見兩側相携行交
章法絕佳

小夜道おやあわういハとせと門を過ぎて
留主せいりお岩そちも傍か随分氣を付不満
誰がこふ共らんまてついでいりて合点
前文サテお出と打連立急でこそ出て
餘波おやけを夜もむがら四方の景色もその
先叙光かと覆ふ雲ふらで雀のやどかうぶく
お松の林お風お花て汀の波おのぶか音お
こびく打寄て高根おびく山彦ハ次叙とく
おつと布引の瀧叙路のおら糸おふとくのとく

初利天寺摩耶山遙
乎延後文敷威母藤夫
人來

ハおふくハ百壽お法ハ穀池村里急でハ
お天寺摩耶のお山をてに見て歷利落去行道
筋もあふらぬ腰の濱遙や磯付ハ神戶も跡小湊
川流る水の澄ならハ愛ハ橋ハ渡を舟
守りの神垣や森も志げハ下置露の垂水ハ里と
早過て砂ハ程ハ上野山ハの吾ハぞ若ハ日布
五百崎曰藪池曰麻耶曰神戶曰湊川曰繼橋曰垂水曰
谷透層順叙地名不祖記來路且寫齊一夜天色欲曉
近ハ横雲のたふびく空も青ハと枝葉志げハ
松ハおふ法ハつらハ丘た脚影石遠目おそれとこ

寫得突兀不啻石塔

一谷歡軍記

新言 虛由 種

若稱建塔為彌陀六自
做補工一節無可安置
若無補工一節撇開少
并不得而疑鬼之意無
所安著

首段既稱彌陀六為老
石工然未見石工模樣
此處一點做工毫不滲
漏是作者精細著意處

ご六が走寄つて是ぢやく先達てきハされと所出
小合せ若考守ふ方付よりや建ハたてよぢぢ
ゑり笠ふふりふらと押直して左かつをゑつ
只指示石塔便一直徑不成文 恰好見て下さりませ何と
字故把此數語點綴一頓有趣

此是早晨農夫趁朝時
候不見幽鬼恰好
弥陀六の管低頭做生
活不知少年去已久
句對農夫一句接少年
被農夫叫覺方纔覺驚
寫得妙極

是早見彌陀六の
ふ所へ石塔とまふぢぢ
のく、業乃ぢぢにあやうぢぢ
建祓ふらぬぢぢ詭人まうりハ怪有ふやつぢぢ
農夫不見少年故有是語
爰よりつはらぢぢ。是彌陀六の
の為卒於終一ぢぢをてぢぢ。三思を径道ふぢぢ
ふらてふぢぢかふぢ石塔とぢぢふぢぢハはぢぢ
ふぢぢハぢぢ。是彌陀六の對
年語而不知

新言 虛由 種

谷嫩軍記

土

是早見彌陀六の
ふ所へ石塔とまふぢぢ
のく、業乃ぢぢにあやうぢぢ
建祓ふらぬぢぢ詭人まうりハ怪有ふやつぢぢ
農夫不見少年故有是語
爰よりつはらぢぢ。是彌陀六の
の為卒於終一ぢぢをてぢぢ。三思を径道ふぢぢ
ふらてふぢぢかふぢ石塔とぢぢふぢぢハはぢぢ
ふぢぢハぢぢ。是彌陀六の對
年語而不知

寫小姐喘吁吁狀如見
凡此段寫處女不費多
語只是一兩句狀貌聲
氣都出

年不在 親に殿お召お振此施主人のと人もないふそ
早や何いい志ゆる。是農何といい目かさかぬ
ふ。是弥陀六語の興天將曉語緊相應
ハテこの爰お断テはん小兒つねハかんふふ
つふ今迄爰ふでふふハテどつちとどさつふ
お召お振くどうべバ俱く百姓共爰々そこと
尋る所へ娘の小雪かかふどい息かをぬい志
付是兒欲性見建塔お召お振ふつらと一言いひたい
るふふととたららつと逢へて下さんせ是相違

農夫言那厮托言建塔
欲謀盜竊暗道私通小
姐唯是不說破妙

青葉笛是呼起藤夫人

しつゝお召お振い親も形も見えぬい句断是弥陀
親に殿お召お振がるやらぬハ忽ハハハこなとの損お召
ぞや所をわけてる但先々親でも存て置えやつと
是農夫對 彌陀六語 いやてや仁幹が能うら所も問を一幾も
受取ふん是弥陀六語 付爰でふりたる石塔とか二付ふ
何ぞせしめら下エ梅ハ樹お振つとをくハうせ
まいびつうけん皆こいくと左さつげハ是農夫
此數語挑ハこれ待ちやんせふハやんふふハ
發下文 心かお方はいえよハ是相違

新言虚由

楔子

評笛譚語不從弥陀六口中說出及從農夫說出來此是主客法

不說不當百錢直說當百錢及妙

くて。六は筒是姐貫貫ふたの六語はとれくこ
 やまあ袋が把外面賞浩持ふ赤金綱賞一番おや裏形容音竹從農夫口でもないが節裏形容音くらしの裏形容音枝葉が裏形容音葉裏形容音いろ裏形容音様裏形容音は銭裏形容音小せう裏形容音ふら裏形容音百裏形容音か物裏形容音ハ有裏形容音ふ裏形容音ハ
 一就是農夫語仁辰是農夫語ハお何の銭是農夫語入是農夫語な是農夫語ふ夫是農夫語も娘是農夫語一
 とい是農夫語く是農夫語この是農夫語お是農夫語や是農夫語こ是農夫語ん是農夫語ふ是農夫語ら是農夫語あ是農夫語く是農夫語ま是農夫語て半是農夫語部是農夫語
 取是農夫語て置是農夫語と是農夫語ら是農夫語ま是農夫語ん是農夫語ご是農夫語ら是農夫語損是農夫語も是農夫語せ是農夫語ま是農夫語い是農夫語ふ是農夫語
宗清若說一句本あ是農夫語く是農夫語む是農夫語ご是農夫語た是農夫語ら是農夫語い是農夫語く是農夫語ふ是農夫語あ是農夫語ふ是農夫語と是農夫語悔是農夫語一
色語素然無礙か是農夫語い是農夫語も是農夫語あ是農夫語ら是農夫語笑是農夫語止是農夫語や是農夫語い是農夫語た是農夫語六是農夫語ふ是農夫語ぬ是農夫語か是農夫語れ是農夫語ふ是農夫語と是農夫語傳是農夫語て是農夫語

後段陣營一段至妙又字此處先把藤夫人為線索聯絡前後兩段

流はるは流は拍は手は俯はと取はとはふはふは。此は時はかりはとはお
 らはれはなり。用は滑は稽は言は語は時はいはひはのは松は原はふは。是は早は小
 うはふは女はハは何は者は成はどはいはくは中はれは走は近は付は藤はのは局はははら
 うはつはとは物はとはいはふは舟は寺はハはとはつはちはおはやはのは教はてはるはも
 とはまはけは色はハは此は處は出は藤は夫は人は道は夫はハは色はくはらはうはつは程は遠は
 いはがは見はれはるは賤はいはうはふはいは女は中はのはうはつは左は一はんはくはち
 らはどはいはでは何は故は寺はとは尋はさはつは志はやはるは。是は農は夫は語はされはばはこ
 らはりはくは様は子は有は流はふは追は手はのはかはいはふは者は志はがはいはくはふは
 げはとは憶はさんは為は。伏は後は文は一はとは宣はふは中はふは目は早はくはもは娘はが

新平戎由

一谷嫩軍記

青葉笛亦在此處再點
至後段更為一始應

敷盛玉織兩個死狀不
從弥陀六小雪口裏說
出又借農夫目擊之言
乃能動人

持ふ袋を不付なふをれらふと見せむ
と手を取かへ給ひぬ青葉の一葉前文是青葉
笛弥陀六與
農夫傳觀詭奇此處若在農夫若弥陀六手裏殊不
雅觀今還在姐兒手便於藤夫人取見之極為恰好
盛が肌刀をさぬ秋夜の笛どややくさふこの手
小もとつて親子も不審顔百姓共口こ小。敷盛
といふ人。此間の戦ひ。源氏の侍態吾の次郎
か手おかり。死おやつ。おやふかい。玉織と
郎。是農夫語其時小いふら。句包著多少慘
酷光景在裏高
や。い。不肉裏上着。殺ふ。居。げ。是又一農
夫語。敷

若説藤夫人一見青葉
笛便言少年是幽鬼及
傷直徑此處借農夫言
説其踉蹌妙極

敷盛玉織可
為二様説
とつては妻ハハ何敷盛ハ村さしとや
福原の館少く母根長をさす下ささらばと玉織は
共いさぶさういふ。世の胸を長い列さ
成た。哀兩個是
為一様説
うけび泣前後ふく少見。小け。これ就仁
取合点のいかぬ。死。敷盛極の
笛のまふれ。おた。石塔。おふ。おとひ
つ。おや。い。是農。是弥陀
夫語。六語。其死。人。来
ふ。物。おや。ふ。是農。是農
夫語。い。う。小。兩箇應答一様字法方
見得狐疑踉蹌様子

前文幾層把山年做幽
鬼摸樣然未肯斷為幽
鬼至此弥陀六口裏說
是幽鬼與後段宗清說
或是平氏一公子似相
矛盾不知此段故為糗
糊語遮掩來路

一た。さつきの爰迄連立てて、あのく物の
の中。うさげを採ふ久へふんだ。掛ハ。幽冥で
る。よな。是弥陀
も。幽一市の里ひのやまを所歎小。雪。始終ど
ふ付。うな。い。ふ。や。と。斗。あ。て。姐。思。不。多。出。語。唯。此。俱。不。被。
と。志。分。か。け。の。折。下。遙。の。松。か。げ。か。む。ぶ。く。馬。の
搏。か。む。い。う。あ。ふ。ふ。大。勢。を。た。六。ご。あ。と。こ。を。性。小
退。手。の。志。先。く。あ。ふ。た。を。後。ま。ふ。章。此。石。塔。の。後。一
と。石。塔。後。此。處。一。點。海。童。の。手。取。忍。り。せ。て。何。思。や。る。つ。つ

前文鋤鎌復於此處點
醒農夫自有農夫模樣

惠大運平鬼惡又帶此
滑稽此是院本慣用脚
色惜不免依樣畫葫蘆

色も追手のやつらぐは所と、よふとふ通もあ
ふたの仕合若も何うもふらむらむらむ。是途平家
の領地小住小御恩の房。下働せうおやふい。是弥
語。語々野人様出語。ア。てん。ふ。小。鋤。の。む。打。ら。ら。ハ
不露出其為宗清妙。は。ひ。ひ。ふ。ら。る。是農夫
也。ひ。ひ。ふ。ら。る。本色語。といふ間もあらせ。矣。砂。懐。硯
立。踏。立。う。け。え。ら。る。ハ。梶。原。が。郎。等。番。場。の。忠。大。須。段
運。平。先。と。して。教。多。引。連。法。つ。と。案。百。姓。共。三
十。余。の。女。一。人。以。あ。へ。を。た。を。そ。ふ。ご。ら。ち。へ。道。
それぬくせ、い成程くそ女ハ、ア、あ代迄伐撲切ふ

是弥陀 演述傳は小走つは 是忠太語。兩箇各一向間。雜成語雖是慣用法亦妙。

不二三里もはるせう、追手の元ふら一足も、早う

ござれとせうをまき成示折波折 扱こそ道のをふ皆こいと

うけ出そありにて立留り、運平、耳小口、志めし

合せやこうげ小娘、演述をはしやうけり行成

一轉折。撒開忠太去單留 打ふがめ、樂志や此間、

運平數箇所以容易殺得 早ふと信書と出し、コリ娘あなう一人、は東る

い寺迄送つと内、いひちやつと出姐兒為青葉笛引子笛既歸藤夫

人姐兒無所用然安放失所則不為文理令伴夫人同去極為妥當 いふふ一男ひがけふ

忠太運平兩個率兵卒數十人與農夫五六個對敵即戰收陣縱然小說殆非人情此處特留運平及幾個被農夫殺散果有個緣故

農夫言語自度會撰陋寫得妙

木毅の源股運平飛で出、どくく、かう有ふと

推量、忠太が糸と強し置水ふ、早ふ所臺を渡

せ、邪がひろくとか、つを。をつ首ふから打後

を、何とくと、割はを運平是打譚自成首尾 百姓共せ、ら笑ひ

や、い、その首のそつ、い、れと、い、ら、が、不、せ、れ

動く間ふ、う、つ、く、ま、う、て、居、ふ、か、り、い、サ、相、手、仕

るおや、手早にこい、と、な、ん、で、不、鞆、太、熊、ふ、打、で

か、い、ま、い、是農夫本色 運平始め、數多あやれ、お、果、も、一、回、小、括

連く渡り合、打、ふ、際、ふ、い、ふ、六、か、い、味、を、拵、あ、ふ

新評 虚由一

逐忠太救夫人可以止
而必殺運平若運平不
殺後段不得捕弥陀六
来若弥陀六不来不能
成後段結局作者之用
意如此

娘いふふとあせふ中若使弥陀六動手與農夫輩一同忿
爭及不成體面如此輕々叙去自好
来達者の百姓共慌先揃へてうらさか打つたこ
しふれと打ぶらり、運平と追取を、投りふん
だりけとばりたり、寄てか、つと打うく急所
しや當りけんうんとめつたふ返返れ、死ふ
いと逃げふ氣家僕又追うらると、さぶ六が待
とと呼くへし、清春の難を救ふ為、おちちらを斗
下ふいふ、死ふ玉や尻かむづか、いふ、あ
ふした掛であらふといふふらあふいふい

殺散

里長純是滑稽此一節
自是一篇打評文字在
前後兩段中間使讀者
不厭倦於全篇趣旨淺
大關係
雖沒關係農夫等殺却
運平是為弥陀六所捕
緣由作者於不用意處
亦能用意

追兵救夫人正文至此照
完以下打評全是餘波

らを事ふらぬぞや、皆うりやとや。今梶原振
の郎等番場の忠太といふお侍か、ごぶつて百姓
共、狼藉し、お運平と殺し、由ふか、い
つ、跡らむ、お運平と殺し、由ふか、い云付。忠太不自來責
發遣里長以成
此一節打評若為、ひうんふるあて、お運平と殺し、由ふか、い云付。忠太不自來責
發遣里長以成
くけ、運平と殺し、由ふか、い云付。忠太不自來責
發遣里長以成
小、皆く尻の、中、に、さぶ六、を、殺し、由ふか、い云付。忠太不自來責
發遣里長以成

新評 虚由一

一谷嫩軍記

十七

這里長平生慣着戰没
尸骸意没刀割的不是
真死好笑

小なとずあやつふハ大さか間ぢかひ。あまや目
かふふて死なれどや。其後扱ふハ死骸ハ一ツ
も疵ハない。弥陀六全副是野人撰拙摸様
不見半點本色留為後段種子。夫が定ふらふ
らも嬉しいとけとからだを改め、あんなふどこにも
疵ハない。さうやあつちのふたさる鹿相、さう
直が教さぬらうハ何のこついる。なはい。中下
うふ物いふ者さつた一人り、さつせりと云得
よまや濁るをや、あんなふとや、誰がうら
ふ、いやあま年の功ぢや、ごご六いう志や、

關歐殺主謀是弥陀六
理當至官分辨今借金
佛為僻躲避是又好笑

又平口咽是院本所載
故事借來點綴筆力自
在

いくふハうのぬが、おまや口くせの念佛が、
たふ成て、ふもあふぬ、亦不脱念佛ニ
字與首段照應そんなら、
唇が指圓せう、日比ちかびふ、ふうあやぶか雀
のあ若やふか、い是ハ一ノまやあんなり口早で
何のららや、字知ま、いぬ、はびあやのふか若
樹つかい、是ハ一ノあまや、鼻ハふと、いふや。丹兵
系ハ、咽ガごろつく、是ハ一ノ次、ハ歯ぬけ、是ハ一ノ指
ふふかいふや、是ハ一ノ箇、以上五箇人物與次郎一人、
前出其名他四箇順口呼出錯雜成趣ソヤ
こちら、どどもりまを、い、の、ハあま、ハ譲合て

不説頭初并里長充關
數説偶然刺得極有曲
折

埒が明ぬ幸爰石と運ぶ繩が有きで圖取志
らよ。うろ。石エ。そまやいやおふいハさぬやうは
座をがきてらると手早ふ繩切、後てもちやうら
やひん極り、結んどの成た、者がいにくれ志や
ぞ、サとれいもよ、本が、ど志とま、か、孤國、思
つて、是、こと、ん、ぞ、ふ、繩、先、引、い、志、が、ハ、バ、あ、さ、ぬ
敷、ふ、ん、で、志、ふ、が、ふ、下、筋、余、つ、ふ、ハ、テ、そ、ま、や、お、れ、
繩、志、や、座、座、殿、と、ら、志、や、れ、是農夫語 不んふそふ志や
おれ、が、と、ら、サ、エ、ひ、け、く、た、え、し、う、ら、い、あ、て、く

未段撥絃促調一句断
一句續故成拗折不得
一氣讀過

ま、ま、つ、と、せ、い、く、バ、悲、し、も、結、ん、ど、の、ハ、が、志
お、や、ま、是里サ 在、座、殿、い、り、志、や、ま、是農夫語 待
よ、お、ま、や、い、う、ふ、苦、が、ふ、い、此、場、の、孫、子、と、知、て、る
る、こ、い、う、が、云、譯、ら、る、苦、志、や、是里サ 劇、が、當、つ、と
物、是農夫語 せん、か、さ、う、取、一、度、是里サ 仕、直、し、へ、あ、ら、ぬ
く、む、り、い、う、と、い、り、志、や、れ、と、寄、て、か、つ、引
立、押、立、ヨイハ 是、ハ、い、く、ヨイヤ 待、て、ん、ヨイ
了、簡、イヤ 志、ふ、サツサ あ、ん、ま、う、ぞ、う、ヨイヤ かつ
立、ひ、つ、立、ヨイヤ て、サツサ こ、ヨイヤ ぞ、

一谷嫩軍記 第三回下 熊谷陣屋之段
 後段文字純是實寫。直實是主他皆是客。而連牽
 前段弥陀六來。緊相照應。毫無虧漏。直實陰計殺其
 子以代敦盛事。在第二回。當時使讀者以為直實
 真殺敦盛。未嘗一筆露其為替身。而至此段。一直
 快寫語々。皆實著。真個驚心駭魄之文。然小松内
 府密謀宗清竊托其子及義經。宥敦盛與重盛女
 結婚兩事。純用虛筆。此是實寫中有虛寫處。
 三行字。未語。觀出。平

前段冒頭一首國歌。後
 段亦是半隻俳歌。相配
 成趣妙。

直實殺一子以救敦盛
 所以名為熊谷櫻是後
 文伏線

解讀與不解讀同然立
 脚一語罵殺當世

家ハハ島の浪少々水却源氏ハ花盛月色を見
 出中勝櫻花メテ熊谷ガ陣所ハ須摩ノ一構ノ要害
 巖ノ逆茂木の中ノ若木の花盛ハ重九重ハ及
 びハ分ル。暗藏敦盛ハ。そ色ハありぬハ人ハとハ熊谷櫻
 とハいハふハそハうハ一ハ花ハおハらハせトとハ此ハ制ハれハ成ハ讀ハ行ハ人
 後ハぬハ人ハ一ハツハ所ハハ立ハ集ハルハ。扱ハハハ咲ハ分ハハハ。花ハハハ忍
 不ハハハ此ハ制ハれハ。以ハ櫻ハ花ハ呼ハ。辨ハ慶ハ敵ハのハ筆ハ志ハやハげハハハ扱ハもハ又
 不ハハハ一ハツハもハ後ハぬハ。ハハ。あハ此ハハハのハ義ハ經ハ様ハハハ此ハ花ハハハ惜ハ一
 枝ハハハ不ハ指ハハハ一ハハハ切ハヤハハハ。法ハ度ハハハ。故ハ前ハ第ハ一ハ回ハ所ハ叙ハ緣ハ由ハ承ハ避
 掩ハ本ハ段ハ脚ハ色ハ報ハ不ハ露ハ痕ハ跡ハ

至此說出敷感悲其不幸
幸反射相摸幸生子後
文一轉以為死者反生
以為幸者反不幸過環
宛轉妙甚

相摸思科藤局安頓處
置讀者亦以為敷感真
死矣不測後面却是不
然作者藉著人處不見
痕跡

もなや其時小彦為したハ、無皮の大夫敷感逆器
量發の拵ふふ子と今夜の軍ふ討死させ夫ハ
島の波小漂ハ家のみ残さるるふんを淺き
身の上とかあらぬをとお理し以前は所恩
も連合ふも情うお方の片付後世の愛お心任せ
小致故成頓任以前佐竹次郎と申て北
面同然の武士跌起下文只今ふハ武義國の任人志の黨
の籬頭然谷次郎直實と人おあつ侍是婦人本色
とすふは所をいふそふとの連合の佐竹次郎今

院宣二字暗謂敷感是
上皇子直實受恩如此
而不能救敷感可恨之
甚

前面許多事跡藤局既
已心裏耳底記得明白
不暇顧別人知與不知

でハ熊吾次郎といふふ。を。も。や。あ。能。吾。次。郎。
か。そ。な。い。か。夫。よ。か。把。敷。感。為。熊。谷。所。殺。牢。記。在。心。自。然。
と。吐。胸。の。氣。を。お。づ。か。何。と。相。摸。以。前。大。内。あ。て。ふ。
系。頭。の。佐。竹。次。郎。と。法。共。小。禁。獄。さ。せ。よ。の。院。
宣。自。が。申。宥。め。御。所。の。内。門。夜。の。内。小。彦。と。わ。
つ。く。を。覚。つ。て。相。摸。與。直。實。情。事。為。前。後。兩。番。寫。出。
の。情。恩。何。の。忘。ま。せ。う。ぞ。い。ふ。ふ。其。恩。を。忘。れ。
バ。助。太。刀。し。て。そ。ち。ふ。夫。熊。吾。を。自。り。討。た。て。た。
是。藤。局。を。も。や。必。何。れ。か。恨。で。是。相。サ。家。前。の。吐。
句。語。

突然謂欲殺直實及相
撲驚問始能說出而前
後顛倒語無倫次急殺
忙殺寫來如見

院の沙所のか胤。無官は大夫敷盛と。及覆鄭重説
犯而辭不可不報。王之子非臣子可得か夫然谷が討ふか。是藤
そまやまあ、誠てごさるる。是相は
何ふかおふぬ。是藤は
物語すてとむ珠は誠し。是藤追付夫か歸りか
第。拙子代尋ふ其間暫くお扣へ下されと。又成一頓住
不為。向と益は
次景高所用有て推参と呼。前面許多切迫摸攝
之如。此一隔斬有横雲は

直實祭墓即是小次郎
墓後文不説瘞骸及於
此處叙出

是景高罵弥陀六然亦
以見敷盛之死或是真
借來稿者讀者

こちくと、は墓の手と取一間、一件は、其中、小場の
軍次立出。又借來軍今日、主人直實志有て廟参、御
用あら、果小仰置れ下されと、地、小鼻付、ま、平
次景高、何熊谷殿、他行とな、い、家来共、具石屋の
親仁め引立、来き、つと答て、科、おさ、白毫の
だ、六、平次、か前、小引居れ、心。弥陀六此段是各
くら、耽仁め、備、何者、小頼、是、敷盛、が、石塔、の、建、一、や
い、平家、の、然、る、ぞ、西海、へ、石、つ、ら、だ、し、能、ゆ、さ、お
子、な、け、ま、だ、お、源、氏、方、の、二、股、武、士、の、初、

極口漫罵透讀之似撰
陋野人不知忌諱者徐
尋其語脉計證救感之
死以脫其生故成此呆
話宗清之所以為宗清
作者用意甚至

い。お。直。い。い。い。暗指直實
偽。と。銘。の。熱。湯。背。骨。伐。り。つ。と。流。し。と。い。い。有貳心
ふ。ち。て。か。ま。直。一。遍。お。ね。も。所。を。理。ふ。所。詮。系。と。い。い。程
ま。申。し。通。石。塔。の。祀。人。の。敷。威。の。此。矣。把敷威斷定為此
字。五。里。ん。の。手。の。扱。置。一。も。ん。も。手。附。へ。さ。ら。ん。建
了。と。石。塔。の。喰。途。打譚語做兩層寫出簡敷。せりて人魂
で。も。手。附。不。取。を。ら。小。挑。棒。の。り。り。に。投。し。ま。せ
う。も。冥。途。一。七。ゆ。し。の。り。た。た。の。さ。が。ん。志
か。り。傳。い。る。や。う。也。中。上。乾。以。此。功。徳。施。一。切。は。

景高在此處無甚大關
係至後面罵直實有貳
為宗清所狙擊一節借
以見宗清武藝雖老不
衰

只是十餘字把直實容
貌心情十分畫出何等
筆力

通。り。で。ぶ。り。ま。る。二層從幽鬼上捏造打と取まめふ
ま。い。何。か。つ。あ。や。つ。て。も。嫌。小。釘。と。軍。次。か。詞。小。平
次。ハ。思。ろ。急。大。か。な。石。塔。伐。建。さ。せ。た。ま。ら。む。合。点
く。應。前。面。二。熊。谷。庚。ら。の。言。鐵。輪。の。詮。義。先。そ。や。つ。り。伐
引。立。来。ま。と。一。間。へ。入。り。お。来。共。石。屋。に。親。仁。と。む
ま。や。り。小。傲。岸。不。屈。伏。引。立。奥。へ。連。て。行。把弥陀六安著
ハ。障。子。押。ひ。ら。り。日。を。早。西。小。傾。し。小。夫。の。歸。こ。れ。過去稍入正文 相摸
ま。さ。と。く。侍。間。程。如。く。熊。谷。次。郎。直。實。花。が。盛。櫻。花。在
段。應。首。の。敷。威。を。付。て。冬。常。代。増。り。故。為。疑。似。語。若。斷。定。為
被。敷。威。至。後。面。有。許。多

不是寫相摸重義不發
其子直實而在馬小次
郎決無死敵之理假使
極口但死萬々無害是
相摸之所以放膽言不
顧其死

フ。の。ゆ。ゝ。の。谷。と。や。ら。で。今。合。戦。中。の。取。り。か。け。
呼。ゆ。子。小。引。さ。れ。る。ハ。秋。の。因。果。成。り。簡。下。さ。り。
お。七。二。層。説。京。師。マ。一。ハ。小。次。郎。ハ。息。天。で。居。ま。を。か。か。
至。一。谷。是。略。バ。戦。場。へ。赴。こ。ら。は。命。
い。む。然。吾。詞。と。あ。ら。う。バ。戦。場。へ。赴。こ。ら。は。命。
ふ。と。抱。堅。固。を。尋。り。末。練。不。性。根。為。討。死。さ。ら。は。命。
た。死。不。説。直。是。死。説。或。是。い。む。為。い。な。小。次。郎。が。初。陣。小。次。
死。説。死。後。而。與。驚。い。む。為。い。な。小。次。郎。が。初。陣。小。次。
さ。大。將。と。引。組。で。討。死。で。か。殺。し。た。ら。は。妹。い。ふ。で。
こ。ふ。心。志。ふ。と。夫。の。心。お。健。氣。不。伺。小。過。意。必。
無。顔。色。直。し。し。先。小。次。郎。の。手。柄。と。い。ふ。ハ。平。山。

聞負傷之言疑其或實
失口急問婦人愛子心
情活盡

直實揚言獲敵將如見
其明目張膽揚眉吐氣

の。武。者。所。と。争。ひ。殺。ぐ。け。れ。高。名。軍。門。小。次。郎。入。て
働。か。ぬ。少。い。負。を。共。共。未。代。迄。家。の。譽。先。説。負。傷。志。
て。手。疵。ハ。急。所。で。ハ。お。お。り。ま。せ。ぬ。ハ。是。相。摸。語。此。
た。手。疵。を。悔。む。顔。付。急。所。な。ら。う。悲。し。い。ハ。是。直。實。語。
去。何。の。い。ふ。か。さ。り。疵。で。も。負。程。共。働。ハ。出。り。
ふ。と。思。ふ。て。妹。ハ。内。の。餘。り。か。尋。其。時。お。あ。も。小。次。
郎。と。一。所。小。引。出。な。さ。れ。た。ハ。急。問。其。相。共。否。ハ。危。し。と。
見。る。よ。う。軍。門。小。次。郎。入。り。小。次。郎。と。む。り。小。引。立。小。
腹。う。ひ。ん。ぎ。き。我。陣。屋。へ。連。帰。り。住。某。ハ。軍。小。摘。

而亦隱然有傷予之情
見於言外讀者要見其
苦心焦慮處

直實意在瞞過其妻不
料為藤局所責問若一
直說可以慰藤局之心
而恐為景高所知大事
去矣左思右想摸樣盡
出來萬鈞筆力

手の大將無官の大夫敦盛此首取なると本告其子
真傷及也
獲敵敷一張吐し、小、扱ハと驚相摸此一驚
未必後、小、聞かふ事、
所。我子此敵と云ふ事、疾、然、谷、やらぬと、後、和、錯、
搦んで、ア、敵呼ひ、何、やつと、引、塞、か、伐、難道、咫尺有、
箇婦人、坐地不、
入眼裏至此便見若使藤局匿
在内室何由得聞直實語說女房取付、これ、く、聊、余、さ、
と、公、あ、れ、ハ、藤、の、侍、局、様、と、聞、て、直、實、恠、ま、し、
思ひ、い、け、る、事、對、面、と、退、敬、ひ、を、此、方、ハ、熊、吾、軍、
の、な、ら、ひ、と、ハ、女、れ、ら、年、と、わ、け、ぬ、為、武、者、と、よ、
い、ひ、こ、た、ら、ぬ、う、首、付、と、云、ふ、不取說上皇子只說其年
少可憐就哀成一邊說來、竹束

直實以景高來在内室
窺其所以故把殺敦
盛事逐一說來不是向
前面藤局說又是向裏
面景高說讀者不要誤
認

おや。相模助大か志で夫と付せ。此句挑撥相摸生
出後面許多文字何と
くと刀追取、せり付るハ、バ、ア、あ、い、く、と、返、事、も、胸、
小、せ、ま、り、肌、が、ら、エ、あ、色、直、實、殿、敦、盛、様、ハ、院、の、侍、
亂、と、と、り、ふ、ら、う、ら、と、ふ、心、得、て、討、志、や、ん、直說上
皇子不
得犯是就行
兇一邊說來拵、子、が、有、ふ、其、存、伐、と、い、か、も、せ、つ、ふ、さ、
念此跡踟若
慮寫得好う、ろ、く、涙、ハ、お、ろ、し、く、此、度、ハ、戦、ひ、敵、と、云、
さ、そ、ハ、安、徳、天、皇、夫、不、隨、ふ、平、家、の、一、門、敦、盛、を、拵、
置、誰、彼、と、鍋、伐、削、小、用、捨、が、な、ら、ふ、故為硬語、以、及、數、
後、文、救命、機、事、
ナ、藤、此、方、戦、場、の、義、ハ、是、悲、事、と、云、掃、下、り、

看叙來有氣勢有骨力
不知者徒喜其音調流
揚可謂門外漢

庵、其日の軍に有増と、敦盛御代討き、河次、茅、抱
語らん、と座と、據此是序、去六日夜、早上、東雲と、鳴る
此、一二、伐争ひ、拔るも、平山、熊、吾、討、取、と、切、て、出
た、平家の軍勢、先、把、平軍、呼、謀、成、中、小、一、際、勝、さ、し、緋
威點出、裝束、さ、し、と、れ、す、い、あ、い、無、後、演、色、伐、さ、し、て、出
出、す、武點出、藝、ハ、テ、健、氣、如、若、武者、や、あ、る、敵、小、目、ふ、
け、を、熊、谷、を、小、扣、へ、さ、り、返、せ、戻、せ、い、お、い、と、扇、を
持、て、打、招、け、把第二回事再叙但彼止叙
事此從口裏說出語氣自別、駒、の、頭、を、立、直、し、
波、の、打、物、二、打、三、打、い、で、や、組、ん、と、馬、上、ふ、が、ら、む

三人語間雜斷續如相
茶如相答如火如錦真
個絕世奇文

是說敦盛是說小次郎
口裏說的是敦盛心裏
說的是小次郎

心づと組、兩馬、が、間、ふ、と、い、は、る、叙得好、何、と、其
若、武者、伐、組、敷、て、是藤、さ、し、が、御、顔、を、よく、見、な、れ
い、前是遠望認得裝束
後是近接看得容貌、定、め、て、二、親、ま、さ、り、は、ん、歎、い、
う、斗、と、子、と、持、も、あ、の、思、ひ、也、録、り、上、帶、取、て、
立、蒼、打、ら、う、ひ、早、落、々、と、是直實語、語未畢挿入相摸
語是急欲知消息待不得語畢
い、め、さ、志、や、ん、し、た、か、を、ん、外、に、討、な、る、お、心、下、へ
ふ、う、つ、ふ、是相、
換語、早、落、々、と、そ、こ、む、此、後一語
更妙
一旦、敵、小、組、志、う、と、何、面、目、あ、ら、う、一、ん、早、首

多少依何多少踏躑句
句帶血言の迸涙

取上熊谷、是直、首取といふとかいの健氣ふふと
 いふふふふ、是藤局語。相模與藤、其仰ふ、此處不用、
 句語氣各別意有所主、
 於涙の胸ふせさし、
 秋小組まで命や控ん、此句着力極重、借我子説、
 公子即反借公子説我子、
 武士のなうひと、大乃を極、
 平山、借来平山、迫出、
 一節且收結平山、
 後の山、
 威と組敷、
 是也、
 申上、
 波濤

所謂母即藤局然其實
是相模吞吐嗚咽欲説
不説欲哭不哭一腔熱
血自肝腸中迸出来

一赴ふ心小か、
 頭をかふふふ、
 かい過行かふ、
 の、
 局語故、
 為腸断、
 ら、
 各、
 母、
 許其死、
 許之故、

一谷嫩軍記

三

如札之面猶曰外面陽殺之陰救之此是義經授直實密旨今以隱約出之故也

拾せんと仰と聞よを熊吾はつと答て起出和
此橋小立置一制れ引板忍けふく義経の御前小
指置不獻呈函首先把禁物示近首坂川の御所少て六弥太
之多少意趣然有含蓄
小忠度此陣所一向と花小短尺客は熊谷小
ハ敦威此首取小と辨度執事ハ制札王則札
の面はと住せ敦威此首付取きつ
拾下想見色變聲顫肝腸崩裂蓋と取其首ハ
け奇女房外寄下息此根と把相摸帶絶昏倒是ハ
我子ハ心本室を省却許多牽纏と覆又成一頓挫

至此說得分明直實殺子一節雖出作者虛構使其徒顧思割愛殊非人情只有敦威是上皇胤子不可得犯之理然後矯情忍痛大有不得已者正能動人

或是直實謬歎一語不語是誇其聰明反是至痛惜花與斬枝相呼應

申家拾小備一後ハ目小うけるは首かさハ
死をなく熊谷がいと小遠む未省得替身痛甚不知痛處摸樣寫ふふ家
去を悲しゆかち小碎分物思不知痛處摸樣寫
得次郎直實謹て敦威仰ハ院此御亂ハ花江南此
所無ハ則南面の嫌說的明白決一子子茂一子
切べハ花小準ハ制札の面本段開首櫻花禁物至是昭應毫釐不差察ハ申
て付ハ知ハ首ハ賢意小叶ハ但交過ハ
ハ御杖判ハ加ハ小と言上ハ曾不說殺其子以代之讀者心裏眼裏皆得明白義経欣
然と突拾一谷嫩軍記ハ花茂惜ハ義経ハ心と察ハ

相摸語半吞半吐不忍
明言其子代死恐隱事
發覺不利於藤局母子
藤局則直言不諱極道
其死我可傷不暇自顧
蓋主客各成其義以見
兩婦人之賢

通のまはるが如役小立も因縁りや是相摸對せめ
て寂期ハ潔う死ふられたかと怖げ是對直實語
又對此一語復發衍とと夫ハ珍もせん方涙清前と忍
復徘徊情景宛然
れ余所ふりふを詞人泣音血涙吐思ひぬり不
痛哭而痛哭之
真情刺意寫出
孫の局ハ清影曇り相摸今此今迄我
子ぞと思ひのぢふ態吾の情それと嘆や悲し
りろかふいたふとを憂ふと歎と取ふ此切ふ
かふふふ詞が恥し我子代為ふ命の執系
いとふ成合せは首代世の中色見ぬる此悔し

義經猶指敦盛為亡鬼
是遮掩人目語然假幽
鬼打扮前段索性寫至
此乃收煞不得不須此
一語

やと不變迷死後哀痛及說生前俱ふ歎くせりいふは是ふ
付いふかかふふ此演れ石塔敦盛の幽冥が建さ
せとのの鳴とけい秘葬せし青葉此笛石屋の娘
が貫ひし忠系ふ入寂前其笛吹ふ時おれ隣子
小福りしふもは性小我子と思ひふ詞まりハ
さぞ消矢し此等疑惑不唯藤局相摸及陣裏有的いやは
笛の音とす下ふけ出し敦盛の幽冥人目をとれ
いふが隣子こし此面ふびハ義経が志輕々說出
妙軍下所盡ハ系ふ此を子悟ふがら本本の

義經鼓勇一節後文無甚妙應不過把前面許多愴悽様子為變調醒看者心目

景高發隱一節又遊甚要緊不過借來為呼出宗清引子

とを兄つて傷らむ。又も涙を流さず。藤局既聞見不死意欲速見之然以直實殺子
代其死義不忍言最難著筆處妙著筆
貝の音ふまふまふ。阿ゆまむ。義経いひさささ。さく
然谷若ふまふまふ。螺の音。出陣の用意く。と仰小
直云畏り。急下間ふ入少け。直實殺子救主一回話說了應入宗清話以照前段文字先把
景高来 寂前ふ様子と軍居る。枕原平次。一間の内ふ
為引子 涌り出。鼓あらんと思ひ。故石屋々。伐徑系ふ事
とせ。窺ふ。義経態多心を合せ。敦威を助。返く。
鎌倉へ住進と言捨け。け出を。後から。ア。と打。

前面悲傷痛切。非才盡文字之妙。而或病於繁冗。忽挿入石工打譚言語變換面目使看者不厭倦

了。手裏剣の骨伐貫く。鋼鉄の石撃うんと。斗不息
絶了。不脱石。何者といふ中。不立出。石在。此。然仁
六。お前方。此。物。不。半。こ。つ。を。伐。捨。上。ま。し。を。不
石工 拙。幽。冥。の。情。深。沢。承。り。つ。て。先。安。堵。呼。應。妙。極。中。ハ
お。崎。と。立。行。と。待。親。仁。彌。平。兵。衛。宗。清。待。と。此。至
始。説。出。如。雷。轟。電。掣。義。経。の。詞。不。怖。り。む。つ。と。思。ふ。と。さ。か。お。ぬ
顔。や。ま。く。と。ら。け。も。不。い。舌。鋒。の。里。不。隠。れ。ぬ。不
い。白。毫。の。ふ。ぶ。ふ。か。い。か。界。で。忍。み。宗。清。之。去。隱。此。蓋。先。平
逐。節。説。出。来。以。見。義。経。知。久。矣。下。誠。や。諺。ふ。ま。至。て。慄。い。と。然。い。と。嬉。い。

新平戲曲十重

磊落氣象不是尋常貌
禱下第所以服宗清

前段說弥陀六眉間黑
痣為呼為白髮緣由不
知後段為便義經認為
宗清確證如應緊密何
等結構誰謂院本戲曲
不足為文章法哉

い。の。け。三。ツ。ハ。人。間。一。生。忘。れ。ぬ。と。い。ふ。借。俗。語。説
一。解。昔。学。盤。の。懐。不。抱。伏。見。れ。里。あ。雪。凍。一
と。汝。の。性。と。以。て。親。子。四。人。不。助。り。ま。じ。嬌。一。内。心
時。ハ。我。身。三。木。不。共。面。顔。を。目。先。不。残。り。不。覺。を
眉。間。の。か。く。ろ。應。首。隠。し。て。ま。う。く。と。此。所。以。々
卒。去。の。後。ハ。心。悔。知。ぬ。と。い。ふ。此。所。以。々
居。不。満。足。や。と。す。り。と。と。六。づ。ら。と。立。寄。義
経。の。顔。心。の。ゆ。不。ど。打。り。が。め。反。射。義。經。幼。尚。認。宗。清。傲。脱。不
醜。一。眼。力。老。や。よ。か。一。老。子。ハ。生
與。直。實。説。戰。一。様。テ。モ。醜。一。眼。力。老。や。よ。か。一。老。子。ハ。生
文。法。相。配。為。章。法。

直實説戰。是説虚。宗清
談往。是吐實。文字相配。
用意相反。

本篇所寫婦人其最美
而節者義經之婦柳若
敷盛之配玉織那君自
殺在第一回玉織見殺
在第二回蕙折蘭摧悲

新平戲曲十重

一谷嫩軍記

三十八

これ。が。ら。ふ。さ。さ。く。在。子。ハ。三。ツ。に。一。人。相。と。志
と。聞。し。ふ。か。く。弥。平。兵。衛。宗。清。と。見。ら。れ。上。を
敬。後。語。本。應。白。既。為。汝。所。知。為。義。經。願。す。時。こ。ふ。と。不。道
宗。清。不。敢。要。應。唯。説。上。半。句。義。經。願。す。時。こ。ふ。と。不。道
さ。ど。い。今。不。ふ。小。指。籠。不。鉄。柄。ハ。峯。鴨。越。と。責。為。を
大。將。ハ。有。ま。い。物。是。言。活。義。又。池。殿。と。言。合。セ。頼。朝。を
助。か。心。平。家。ハ。今。小。茶。心。抱。是。言。活。頼。朝。宗。清。ハ。一。生
か。不。覺。一。頭。是。不。付。て。も。小。松。殿。傳。信。後。の。お。う。ら。平
家。ハ。運。命。未。危。一。汝。武。門。と。道。れ。身。と。隠。し。一。門。外
泣。吊。一。と。唐。土。育。玉。山。一。祠。堂。金。と。偽。り。三。千。兩。也

義經未始知重盛之女
與敦盛殷好如彼唐突
把鎧篋為姐兒贈殊無
來歷作者未免疎漏然
不如此說去本段一望
慘怛嫌無濃厚處蓋出
不得已

出立と好む所の大あかり。鐵於此覺成若し拘り
たに鎧櫃。直實不必著甲今必說其著甲一以見
前回打仗模樣一以便於脫盛露頭 御目通り直
し置、親仁、先不指名單呼老 氏方、大切、小育、娘、
は、鎧櫃届て、此、上、彌陀、六、既已呼為宗清怒、
六と、宜有此、疑問、宗清以、色、を、平家の余、頼源氏、此、大
將、頼、重、子、筋、は、是、義、經、語、又是歇後語、面白い、こ、ぶ、六、り、頼
子、れ、て、進、せ、忽成獲、拙語、娘、へ、は、相應、ふ
下、此、物、下、内、ハ、何、で、ぶ、か、り、ま、を、改、て、こ、ま、せ、う
と、蓋押、此、を、敦、盛、依、が、ぶ、つ、う、と、は、孫、の、か、か

只此一語致謝義經這
老剛硬性子寫得妙

是以子代敦盛敘事只
不過一兩語若縷述絲

け、寄、か、至此忍不住婦人聲口妙寫出、蓋、ひ、つ、ち、や、り、此、内、小、ハ
何、あ、も、あ、い、何、も、好、い、く、ホ、是、で、ち、つ、と、虫、が
納、ま、直、實、貴、殿、此、禮、は、此、制、札、一、枝
と、さ、ら、ば、一、子、代、切、て、禁、切、ハ、い、と、い、ふ、小、お、様
ハ、夫、お、向、ひ、系、子、此、死、念、ハ、忠、義、ハ、御、心、ハ、小、あ、ふ
ら、か、て、存、ふ、か、ら、も、源、平、ハ、孫、ハ、中、と、ふ、し、て、至
お、敦、盛、様、と、小、次、郎、と、取、う、相、摸、似、代、着
寂、前、ハ、咄、有、此、語、使、不、唐、手、負、ハ、偽、ハ、在、理、小
小、臉、不、ひ、つ、む、さ、い、連、係、つ、ふ、敦、盛、依、又、平、小、い

蓮生法名湊合得恰好
古今英雄豈子成敗得
失年壽脩短何物非夢
豈獨十六年哉

此、哭真是痛哭此、
淚真是淚疾、只此一、
勝他十萬言。

換是ハと取付と、何等々女房大將の性情少て
軍半小歎びの通り、何れと云ふか、我々懐然吾
不向ふを、西方弥陀の國、移小次郎、秘し、
不尤品蓮、先登與宗清語相應、
一、蓮、蓮、
先登與宗清語相應、
罪、
消滅此、
情、
消滅此、

久坐無益是作者調
世作冗長沒緊要的文
守者且自贊本篇繁簡
得宜長短稱節

前段宗清冷眼看世冷
語罵人後段翻做熱肝
熱腸罵言念激莫不至
寫冷處極其冷寫熱處
極其熱妙甚

一谷嫩軍記

所大將藤の局も、不脱戰、
長石ハ益と、
け、
生返り、
い、
下、
が、
家、
助、

一谷嫩軍記第三回終

書新評戲曲十種後

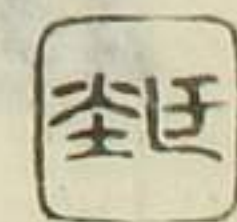


戲曲難鄙。結構布置極妙。今得此評讀之。不覺手舞足蹈。可以為詩文法。可以為作文訣。金聖歎評選古文。

名曰天下才子必讀書。余上
將頌此編。

明治庚辰夏六月書于學

龍吟樓 一六五士候



明治十三年七月三日版權免許
明治十三年七月出版

評者 南葛飾郡須賀村
二百十二番地 依田百川

著者 故人 並木宗輔

出版人 京橋區五郎兵衛町
廿二番地 太田武之助

發兌書肆 丸家善七
太田勘右衛門

東京書林

大坂書林

丸	松	柳	前	吉	別	岡	東	水	江	青	北	牧	山	稻	北
屋	村	原	川	川	所	村	生	野	島	山	澤	野	中	田	畠
善	九	喜	善	半	平	庄	龜	慶	喜	清	伊	吉	市	佐	茂
	兵	兵	兵				次	次	兵		兵	兵	兵	兵	兵
七	衛	衛	衛	七	七	助	郎	郎	衛	吉	八	衛	衛	衛	衛

010190508892

